

千葉市水砂遺跡出土の石皿

宮城 孝之

I はじめに

1990年から1992年の3年間にわたり、千葉県教育委員会から文化財保護指導委員を委嘱され、おもに千葉市の貝塚を中心に埋蔵文化財パトロールを行っていた。

1992年の夏にパトロールを行った際、千葉市水砂遺跡の所在する畑の地主横田邦雄氏から耕作中に出土した石皿を見せていただいた。千葉県内から出土した縄文時代の石皿としては大型であり、今後の一資料となればと思いますここに報告する次第である。

II 水砂遺跡の概要

水砂遺跡は千葉市誉田町東水砂に所在する。現

況は畑とコンクリート基礎のビニールハウス、数軒の民家で占められている。第1図のスクリーントーンで示した地点が遺跡の位置である。東京湾に注ぐ都川本谷から東南に向かい分岐する仁戸名支谷の最奥部にあたり、東西両方向から入る小支谷に挟まれた台地上にある。

水砂遺跡はその位置が文献によって若干異っており、遺跡名も統一されていないわけではない。『千葉市史』史料編(註1)の遺跡地名表には「南水砂遺跡(水砂遺跡)」とされ2つの名が記載されている。当文化財センター発行の分布地図(註2)では第1図で示したスクリーントーンの中に3遺跡がふくまれている。中央を走る道路で遺跡を分けており、西側を東水砂第2貝塚、東側を椎名谷



第1図 遺跡位置図 (1:50,000千葉)

第2遺跡、椎名谷第3遺跡としている。3遺跡とも時代は縄文時代中期・後期で、地形的にも東西両方向から入る支谷の末端に位置する同一の台地上にあるという点から合わせて一つの遺跡として捉えた方がよいのではないかと思う。

本稿では、石皿を出土した付近に貝が散布していることから東水砂第2貝塚として報告してもよいかと考えたが、石皿の出土地点が正確には当文化財センター発行の分布地図による椎名谷第2遺跡にあっている点や上記のように台地上は一遺跡として見た方がよい点などから『千葉市史』第1巻(註3)の記載例に従い「水砂遺跡」出土として報告しておくことにした。

水砂遺跡は、昭和34年刊行の『千葉県石器時代遺跡地名表』(註4)によれば縄文後期の堀之内式及び加曾利B式土器を主体とし、まれに縄文中期の加曾利E式土器が散布する貝を伴わない遺跡となっている。『千葉市史』第1巻によれば、昭和44年に加曾利貝塚博物館が、縄文土器出土の通報があった際に試掘を試みており、堅穴住居跡の一部が検出されている。その時の所見では、出土した土器は加曾利EⅢ式の深鉢で、炉体土器として用いられていたものらしい。内部に灰と焼土が充満しており、周囲に硬い床面を確認している。地表下約1.2mの深さにあたり、かなり深い所で検出されている。住居の床面を覆っていたのは、ハマグリ・キサゴ・アサリなどを主体とした混土貝層でレンズ状に堆積していたという。遺跡内の100~150mの範囲で直径2~3mの小貝塚が数か所に埋没していることが確認されている。この点から水砂遺跡はいわゆる点列貝塚とみることができ、縄文時代中期後半から後期前半にかけての集落遺跡とみられる(註5)。

Ⅲ 出土遺物

第2図が出土した石皿である。完形だが、耕作中に機械にひっかかり出土したことから一部分が削られている。最大長42.9cm、最大幅31.7cm、高さ9.7cm、重さ10.6kgの大型品である。石材は多孔質の安山岩である。

形態は楕円形に近く、掃き出し口の部分でやや幅が狭くなっている。掃き出し口以外は立ち上がった縁を形成し、外形に合わせて4~4.5cmの幅でめぐっている。中央は広くて平坦なへこみを作り

出している。この形態は使用するうちに整えられたのではなく、はじめから敲打によって整形されていたものと思われる。外縁部には整形の際についた粗い敲打痕をよく残している。中央には大きな穴があいており、作業が繰り返されるうちにしだいに中央のへこみが顕著となり、それがまた周囲の面を使いづらくさせ中央での作業運動を一層助長させた結果、穴があいてしまったものと思われる。欠損した穴の縁辺部に円みが認められることから穴があいた段階ですぐに廃棄されたのではなく、しばらくは使用されたものと考えられる。中央の穴から掃き出し部にかけてヒビがはいっているが、発見された時に入ったものではなく、中央に穴があいた前後にできたのではないかと思われる。

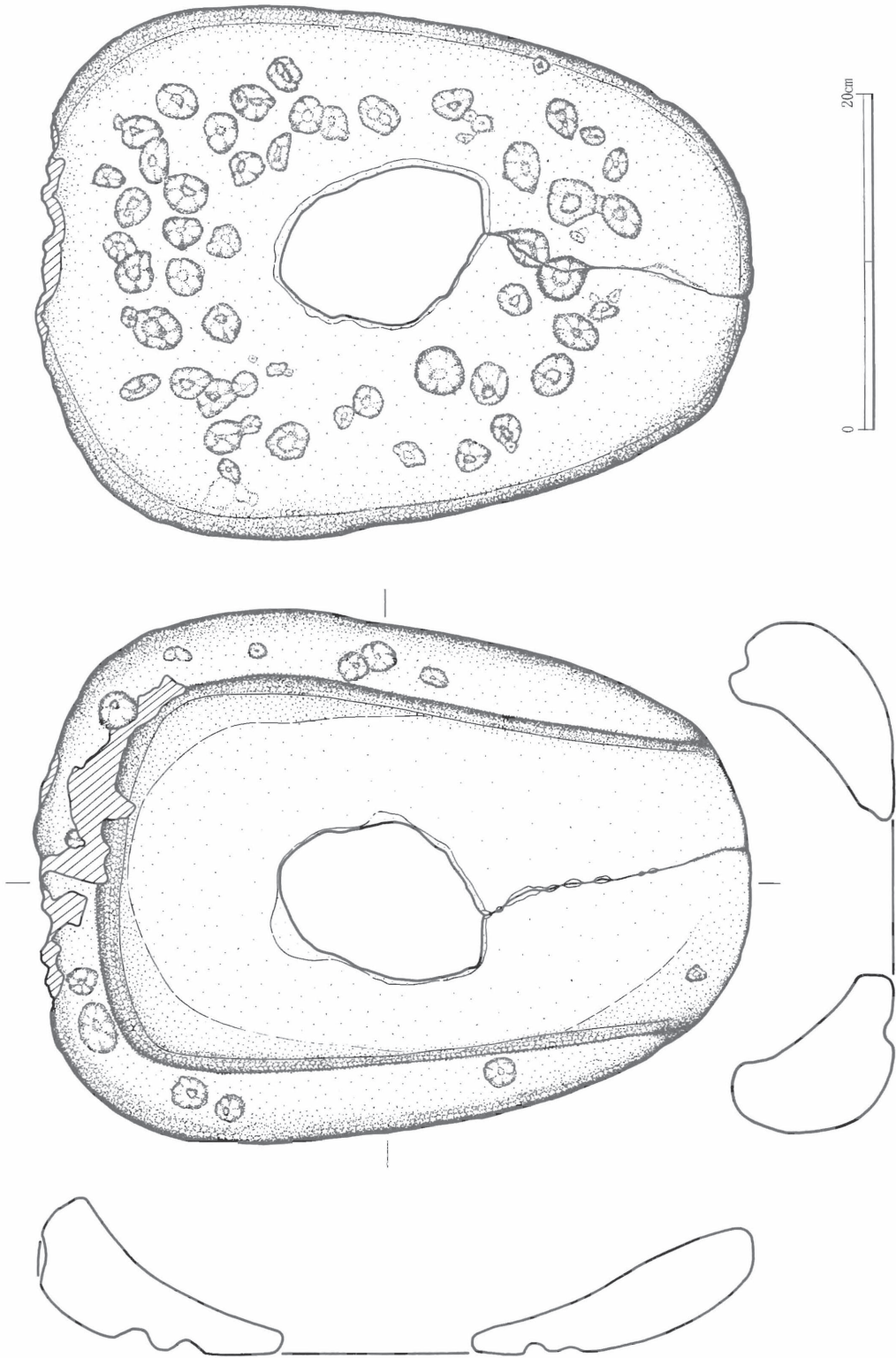
作業面となるへこみの大部分が滑らかであるが、コーナーの部分と掃き出し部の図面左側がやや粗さを残しており、この部分は使い始めたころからほとんど減っていないようである。

表裏両面に凹み(註6)があり、表には13個、裏には50個が確認できる。側縁には一つも認められない。多孔質のため小さなものは、敲打痕か凹みか判然としないものもあるが、図示したものは明らかに凹みと認められるものである。凹みの形は円形に近いものが多いようだが企画性を認めることができるほどではない。この凹みについては別に検討してみたい。

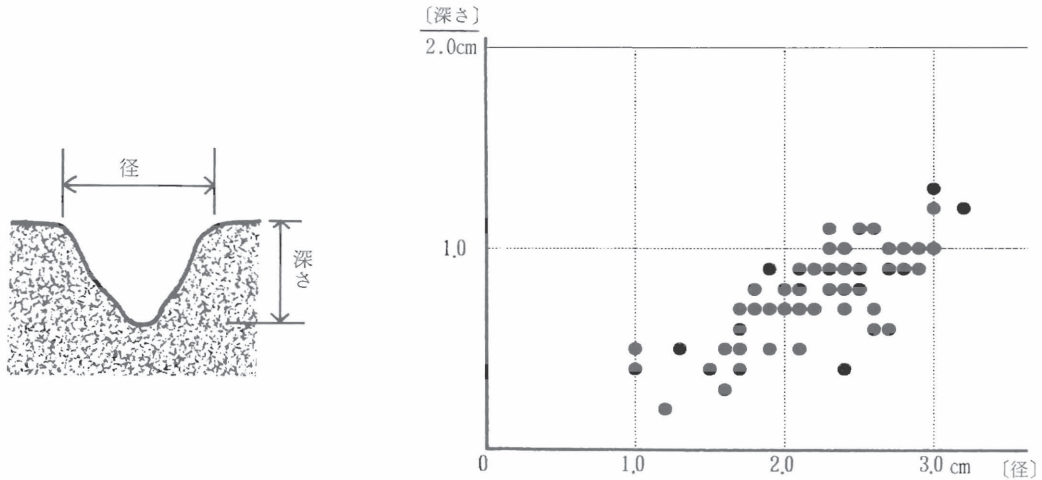
最後にこの石皿の時期であるが、形態は安達厚三の分類によるIV a類に属する(註7)。IV類は中期から後期にみられ、中期の石皿には凹みを伴う例が多いということから、水砂遺跡で出土した石皿も中期の石皿とみてよいであろう。すでに報告されている土器の内容から中期後半の加曾利E式期に属するのではないかと思われる。

Ⅳ 石皿の凹みの検討

縄文時代には凹みを有する石器がいくつかある。凹石・石皿・蜂の巣石などがそれで、凹石などは中部地方では一遺跡の発掘調査で100点以上出土することもまれではない。叩石や磨石の機能をあわせ持つ例も多く、凹みの浅いものもあれば深いものもある。石皿や蜂の巣石といわれる石器にみられる凹みとは形態や深さの点でやや違いがあるように思われる。凹石はドングリなどの堅果類の破



第2図 石皿美湖図 (1/4)



第3図 凹み計測値散布図(註8)

砕に使われたとする見方がつよいが、これらの石器に伴う凹みの成因については定説はないようである(註9)。

水砂遺跡出土の石皿には計63個の凹みが認められた。前項でも記したが、形態は円形に近いものが多いが企画性をみいだせるほど定形的ではない。第3図に凹みの計測方法とその結果をグラフにしてみた。凹みの1つが欠損しているため、62個を数値化した。径は不定形のものはその最大長をとった。62個のうち最大のものは径3.2cm、深さ1.2cmを測る。平均の径は2.2cm、平均の深さは0.8cmである。径にはばらつきがあるが、深さは0.7~1.0cmのものが39個と最も多く62%を占める。凹みの断面の形状は基底部がやや突出しているものが多く、平底なものはないといつてよい。どちらかといえばU字状というよりもV字状に近い断面形である。凹みの形態が明らかな円形を呈しておらず、内面に回転痕と思われる痕跡もないことから、回転運動によって凹みが生成されたのではないことは確かである。底部の狭さからすれば先端を比較的鋭くした道具で敲打を繰り返した結果このような形状の凹みになったものと思われる。

いったいこの凹みはどのような目的で形成されるものなのであろうか。水砂遺跡出土の石皿にみられる凹みは側縁にまったくなく、特に裏側の底部に多い。裏側の凹みは、当然裏返した状態で敲打を加えて作られたものと思われるが、穴があいてしまった中央には凹みがつくれなかったようである。中央をのぞいて周囲に凹みが巡っているように見え、あたかも破損を心配して中央には凹

みがつくれなかったとも考えられる。凹みはこの石皿が使用を開始した段階にはなかったのではなかろうか。作業中に石皿が動かないように配慮した滑り止めとも考えられるが、表の縁部分にも凹みが見られることからすれば滑り止めのためだけにつくられたとは考えにくい。また、このような凹みは縄文時代中期の石皿に多いだけで、他の時期の石皿にはほとんど見られないものである。したがって、凹みが石皿に必然的に必要なものではないということである。

このような点からすれば生産的な機能を持たせるために凹みがつくられたのではないと言ってもよいのではなかろうか。しかも使い始めた時にすでに凹みがついているのではなく、使われていく過程でしだいに数を増やしていくのではないかと思われる。

石皿は生産用具としての機能のほかに、祭祀的な機能も論じられている。安達厚三は通常の使用では破損しにくい石皿が、小片になって出土することが多いことから「石皿には完形で廃棄される打製石斧とは異なる廃棄行動があったことは充分推察される」(註10)としている。先にみてきたように、石皿に見られる凹みの生成は一度に行われるものではなく、また廃棄行動の一つとして凹みがつくられるのでもないようである。日常の生産的機能とともに別の特殊な機能をもあわせもっていた可能性を十分に推測することができるのである。石皿に残された凹みは、日常性の中に石皿を媒介とする特殊な行為がたびたび行われ、凹みを石皿に残すことによってその行為の証としたと考

えてもよいのではないかと思われる。

V おわりに

千葉県は石なし県といわれる。旧石器時代から現在に至るまで多くの石材が他の地域から搬入されている。

県内の縄文遺跡から石器の工房跡が検出された例は極めてまれであり(註11)、この点から、縄文時代の石器の多くは他地域から原石のまま搬入され加工されるのではなく、製品としてか、またはそれほどの加工を必要としない状態で搬入されてくるのではないかと思われる。

石皿の石材については、一般に安山岩などの目の粗い石材が多用されており、表面の粗さが石皿の機能である植物質食料の圧潰・破碎・粉化などの作業に適していることは言うまでもない。

加曾利貝塚出土の石器を分析した新井重三によれば、加曾利貝塚から出土した安山岩類はすべて群馬県および栃木県から流入しているという(註12)。いったいどのようにして10kgを越えるような石皿が運ばれてくるのであろうか。これにはさまざまなモデルを想定することができる。産地との強い関係を持った交易ルートが存在していたのか、あるいはたまたま偶然の交易でもたらされたものなのか想像の域を出るものではない。しかし、この問題は極めて重要な問題である。

ここで取り上げた水砂遺跡出土の石皿一つだけでは以上のような問題をたやすく解決できるわけではないが、一つ一つの遺物の詳細な観察が多くの問題を解決する手掛かりを与えてくれるものと思う。前章で検討した凹みについても同様のことが言えよう。

最後に文献等で協力をいただいた豊田佳伸、西野雅人、三浦和信の三氏には記してお礼申し上げます。

註

1 千葉市教育委員会『千葉市史』史料編1 1974

年

2 助千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』1986年

3 千葉市教育委員会『千葉市史』第1巻 1974年

4 伊藤和夫・金子宏昌『千葉県石器時代遺跡地名表』1954年

5 後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』27 1970年や堀越正行「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31 1972年では水砂遺跡を点列貝塚としてとらえている。

6 ここでは「凹み」=くぼみと読み、凹石や水砂遺跡出土の石皿にみられる小規模な穴についてのみこの字をあてて使用する。

7 安達厚三「石皿」『縄文文化の研究』7 1983年

8 グラフ中のドットについては同一の計測値はドット1点で示してある。径と深さが他の凹みと同一であるものが12点ある。

9 凹みの生成については、ある行為を行うためにあらかじめあけられたものであるのか、特定の行為を行っていく過程で生成するものであるのかは定説があるわけではない。

10 註7に同じ

11 佐倉市向原遺跡では石鏃の生産にかかわるとみられる3か所の石器集中地点が検出されているが、他の石器に関する報告例は県内ではほとんどないといってよい。

大原正義『佐倉市向原遺跡』助千葉県文化財センター 1989年

渡辺修一「流山市こうのす台第I遺跡採集遺物について」『研究連絡誌』第33号

助千葉県文化財センター 1991年

12 新井重三「加曾利貝塚より出土した石器用石材について」『縄文時代の石器』貝塚博物館研究資料第4集 千葉市加曾利貝塚博物館 1983年